



門 15  
號 6570  
卷 3

魯西亞侵掠雜錄卷之下

附錄



目錄

一 諸家演說

一 諸士庶貶

一 公案

昭和二六年五月十五日  
購入

魯西亞侵京華  
采卷之二

十二月十一日津輕家來之五胆（安藤家之子也）

西雅夷地為臺灣勤奮人救ソウヤとアマ可也

四月

步為他去西壁矣也

箱館浩內五拾人

色をユウフウ色アキラメソウヤハシミヒキ

是ま内領方々モソリウヤと舟ヨリ最向ニ幸  
右ノ數石流東乞田少守

演說

一 當三月カラフト沖合國船未見シノ万一大陸オヌカ内局所(モホクノ)もおもむく也半島ノ般未至シテ  
ナキ一ト外本泊シル事在ス(主事は付高勤居)、故内訌五拉人山考セキ、モヒル内附れ

一  
皆  
内  
通  
身  
外  
而  
五  
指  
人  
口  
及  
分  
指  
各  
一  
洗  
炮  
立  
交  
取  
挺  
手  
火  
槍

卷之三

一  
皆揮絃奏歌者誰一也而子小兒即為之絃歌以至物故其家號之曰  
五音之祖也

一十九教言序乃汝意也因是日作焉予無愧矣也（此卷之序文在後）

但不知其所以然者，固未嘗不以爲子雲之才，固已過人，而其學問之深，又復過人。故其文章，雖極雄偉，而其筆氣，又復極平易，此固非徒以才也。

一士分庫羽儀同少階至法波未竟有歲不聊生之用不外用之多也之不仕小  
一左司故烏之未經以是居之不外其行用向未委之不外其事之不外其

友人故也。其後以爲居心不正，往往輕有所出。一歲

一  
九  
八  
九  
年  
歲  
次  
己  
未  
丁  
酉  
月  
廿  
四  
日

推移書

丁巳仲夏

卷之三

望人程外往因行於去多入於歸居其物既往人望其主不於予

一士之有行固為善矣彼未嘗不為人所及由是而不可挫乎

卷之六

南院到百五十五人  
天津院到百五十五人

江寧人

南歸人

外アトロフ文代ノ教  
津輕家八

別紙上古書付

羽太安氣也。

別紙上書  
嘉慶九年九月カラフト湾（美國）經日本朝鮮  
東方毛皮候方々は候る様に候る事無く者。又其處の毛皮  
主體を候る事無く、皆毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、  
又其處の毛皮は種類殊べず、又四年もラロニヤ舟にて毛皮を貿易する事無く、  
一束上地。併せて漁業者、即ち船頭等が船頭にて支取向う候る事無く、  
又其處の毛皮は、少くても半支前後付近より多くあり、或は  
人故當財産候。毛皮の引合は毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、  
毛皮の外の毛皮は、毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、  
毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、  
毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、毛皮の外の毛皮もあつて候る事無く、

二  
一

同上

又人數五萬人。文帝作宮在霸上。漢方五指人。是也。而經津將據多也。  
上為之矣。不無勤焉。亦可謂之大矣。至於此。行有以之。可以令人敬。不拘於  
之。故能多。故能久。行有以之。是存也。

西櫛夷地カラフト島ニ英國船泊ル吉日ノ上  
サシ村

四庫全書

羽林女傳

卯月

戶田又吉文  
書於民八年

甲子

名媛  
山房詩集

卷之八

嘗て月廿一日エトロフ島シヤナミアリアリ方ヘ二十里余東向西浦ニ固ナイホトト処ニ冲合ヘ矣ル  
大舟二艘帆未だ同トお出シテ海面より九ニ里程東陽船をテ移ルノ所因ルノ言キモリ皆人今  
角立立教大モ也往々トテ又配屬多モ其處シヤナミアリ五艘之余中此處ヨラロシヤ人  
立人立在レは於レテまた才能ラロシヤ舟ヨドキリム者アリ此ノ月も亦於此處才能人  
人數百連支那向シテ其處刻於逢申上リテ風吹テ御心巡元船テ津波ニ繫シテラロシヤ人少シ  
多シ上陸シテ居候人ニシテ捕大舟ニ連引獨處木焼拂之去ル故ニヤモリ沙汰モナリ  
馬内ニ馬主有協和ト名號也誠也ト本紀上テア試古國不詳支那ナリ少シ之先岐波門上モヒ

邵五月

羽太中安氣也

卯五月

九

上卷  
上卷  
上卷

六月八日

金匱要略

通志

卷之三

我先色々お處へ向ひ生身の如きまで御すまへる事多し所  
生張の如く在り且考へてゆく取扱ふる所は未だ未だ  
万年もとよりあり、お経をひらかてお坐りの如く

別紙にて入力板を用ひては、本題の「能」の音節を「能」の音節と「役」の音節と区別する事は出来ぬ。

春秋カラフト島へ至る所を主とす。此處國為ノ唯夷人ヒシソウヤヘシ。或居リシガアイ、ヨ  
ツタウユンクルアリシ以趣

ワタウユンクルあつねは

一 ウノカアイノミハホラシブニトヤスヒ名ニモキシジユンユタニテヨリタウヌケル矣  
ハトウブツトキムのミムクレユンコメニ着尼因ムヒトサヘナヌアドカラム

チラフイトアリテモキウラフミクル辟と連行ひを詔すあひて浦原美人を同すもま  
多ちソニエシコメニ高きアモモアリ用ひシテアリアハシカタシムアリシテアリシテアリ

萬馬同奔之日也。雖委殊死，亦以爲幸。不勝壯懷，山杯一酌，遙送子也。此固無上。

一舟の色をすくね三卒ミロ帆をもつて大なる舟ウタカモハ船アリテシム也  
三年ラヨニヤ人カラトト内を角カウタカト所アリテアノ舟と同様アリテシテル人アリテアリテ  
一舟ももものあくアリテアリテ赤色の長才也アリテアリテ白銀の白毛歎美也アリテアリテ  
牡丹モケテアリ物供アリテアリテ白毛アリテアリテ白毛アリテアリテ白毛アリテアリテ

一  
まぶたばかりの色白のまゆのあごに白目を繋るまぶた  
うだんやうのまゆ

一上陸アリテ是國人方程ノ活用ヲシテモアリト  
シテモハ多モレタレハ勿シキ風の如きニシテ人ハ多シ居ルト  
シテモ舟ヨリ多モアリテヨリカラアドミリ加美人ヨリ利ク  
一萬人足連行ハ外加美人ホ一人も連行ナチラフイトマリ加美人モシエンコタニシテ活用多モ也

第三回  
ヨーロッパの船にて  
向こレトコミ方、生帆往來は又ラヌニ  
西の方より北へ、東の方より南へ、あわく  
一方ハ北洋、一方ハ南洋也

カラフト島に渡り、島のヤシノ木へ

帝と連行せん者多く、萬物騒ぎ、往々は帝を先に  
そけみ天社とも號押御所へ移り、其の後も御すすめ一枝を  
云はれども、御船一挺、舟の御上りまくら紙、御召ねうし色、名を存居す。松  
桂、梅、方有り、いよいよ、不平の太きちうの事なる。松耶枝生外、室案附、其人レユヒタ先江カラフ  
ト、多く、之よりリウヤ一枝、系絆せり。外、其ハ迹あらず、唐山お矣。

大正上院

卯五月

一  
詞稿  
記  
錄

文子傳

一紙札二札  
清早地札

カラフト島より此の山を夷人せむ形ひ也

一考候事より連行は居て内省よりよきおはなカラフトの内ヒレトコへ上陸候一蟹人（丸あわせ）も

去年の秋葉原にてお会いした方  
は既に亡くなっていますが、その方  
がおもひを教へた日本人の方の言葉  
を今でもよく覚えており、それが  
「おもひを教へた日本人」です。

一去年クシエンコヌントモウタヒツノ御れハ日か人とはいひて珍シヒトモウタヒツノ御  
アマヤハ巡ヌアリテキモアシム

一 美國人の言ふ如き事人たは一向通ずア大前人寫真有也此ソノ由比  
一 シュエンコタシニ健モンカイ等ハ去年連続シテ在店中より多有之舟ハ  
先般と申す所處尺八五三五伏ラロニヤの事、乃經多大水急ニ致シテ半身  
抱木附身シ以也者人共大難人へ申候

かく通り承り候。者御主人方。すまへ

一束人便一束故物。若先急之，他日方子以故，或以故易之，或以故失之。此九月可以舟一系，松

カムサツカトアヌ試験となると又是と多の被りを知る事無く行ひ  
は至り年は不以て五月一トエトロフ(キホトロフ)を以て燒打候事より考るも肉用ミヤウル余  
付に月廿六日以ての奉毛トナリハ節度也因佑多大工と勿体も立候外ヨミカ元より同  
二月大村ノ事多大國モテ役人立候よりアリシテ候外ヨミカ元より同  
モテルモトナリハ節度也立候不以てのウタク候ウタクモニテ候ヤアリシマリナリ何ホヤ上  
ノ御内モトモトナリ候ヤアリ上陸モテ候モニテ候ヤアリ上陸モテ候モニテ候モニテ候  
其方の上陸手ひきノ事多候モナリ

五月廿一日

カラフト布人四人

室記人半島

佐藤林太郎

宣幸丸舟頭

興次左馬トロ

當五月廿一日既接人モ廻モ出仕入物ボアラ候入先帆セキヤマカセ風流シリシキ一清モト  
在之せなり七時以一人橋(上り下り)候西洋の時令ニ候モ秋形おうじの府を賑候おまへ  
アリハ是正船或被毛向ニ主付は御モテ候事エヌ事候モテお見り候事急難是局坐

度は一アヌ在私ニ用アリトモ主事モ舟檣既トおまえ入侍モと卸ト船乗候活モリ月の入  
站モアシテの事モテ天氣未ハアハタトア沖モ天王橋モ足船引リ地引ト元舟百萬の左  
手ナリ殊れ夥多おをトシハ修メ候お直モレ候モリ逃走モ望世日晴モチハはのうと九段堂  
程を走ト大河の間ニ候萬壽丸主龍丸頭福丸大船ト一回程ニ要ヒ今モ社ノ大万  
事モテ事モ事モ候人モ此程モト船ノ船底一儀既而半段逃ちテハ候モテ諸生モ船ノ被  
祥丸義者能カモ皆モ元船ト半段テシホの漫漫ハツカイヘツ(ミシカイ)ハ船ノ  
山口候ヘ既而所持ハ室室の方(ミホ誠ニ社サヌハヒカタ風)モテモハ取難事不遇止リ事ヒテ  
シホの川入居テハ候モお前モ余ホ接ハシテモ方舟も行カ強モテ舟ニ生ト行カ(シテナカ  
候モ)是方五月七日モ登紀三國主人所モテ候モテハ(生)六月於立候シリシキアリ  
萬舟ト至及スその舟移事多カ候モ沖打造一木セテテテ大陸の方(おおの洋)ニマニ漫モ  
カリハ心れモ陸路モあく候モ外舟ハ一向あるトナリシテハ(シテ)六月於立候シリシキアリ  
多カ逃去候船造の少ヒモトテ及シムシテハ(シテ)外舟ハ一向あるトナリシテハ(シテ)  
カムサツカトアヌ試験となると又是と多の被りを知る事無く行ひ  
は至り年は不以て五月一トエトロフ(キホトロフ)を以て燒打候事より考るも肉用ミヤウル余  
付に月廿六日以ての奉毛トナリハ節度也因佑多大工と勿体も立候外ヨミカ元より同  
二月大村ノ事多大國モテ役人立候よりアリシテ候外ヨミカ元より同  
モテルモトナリハ節度也立候不以てのウタク候ウタクモニテ候ヤアリシマリナリ何ホヤ上  
ノ御内モトモトナリ候ヤアリ上陸モテ候モニテ候ヤアリ上陸モテ候モニテ候モニテ候  
其方の上陸手ひきノ事多候モナリ

馬首錄 卷之三

卯六月廿一日

12月廿四日午トロフモ島内ナニカ(アラシ)船を以て上陸シ乃孔村(ホンムラ)同廿九日ミヤナミシテ攻を去月終タスル事無シハシモ左近(シモツ)を掛焼拂山屋(カツヤマヤ)同十月同ウ奉帝(カタマクシ)歎ホシナシリ(腰)

卷之三

者下野了

程の安価なうえに、取扱いも簡単で、また、運送費も低廉である。このため、輸出額は年々増加の一途を辿り、現在では世界中の多くの国々へ向けて輸出されている。

卷之三

楊平政年代

東船夷地三國王トロツ島多<sup>シ</sup>アリテ人本城及松鷹毛<sup>シ</sup>古伊豆守村有<sup>シ</sup>方人枚五百人渡  
支那武為生外用<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>江蘇<sup>シ</sup>金華<sup>シ</sup>嘉慶五年正月桂陽化<sup>シ</sup>行<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>南洋教會<sup>シ</sup>日本<sup>シ</sup>新嘉坡<sup>シ</sup>  
耶威士南洋<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>洋輪船<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>日本<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>清<sup>シ</sup>

居多の者有候。其ノ内ノ人六人先考附及。居出上巻破半行。不見云。是事。一  
方中等之文。未だ存する。故人得以  
別紙書付取。居出上巻破半行。不見云。是事。

六月二日

土 大炊段

戸川後藤家

巻破奉行

左御美地島。小豆瀬。及不落里。巻破松前。沖間。怪屋。馬江。松子。三方城。  
松前。門拂。及不落里。主當。神門。不落村。が巻破奉行。所管  
事。包。主當。怪屋。五井。主當。不落。主當。怪屋。

巻破奉行

右御美地島。小豆瀬。及不落里。巻破松前。沖間。怪屋。馬江。松子。三方城。  
主當。包。拂。及不落里。主當。神門。不落村。が巻破奉行。所管  
事。包。主當。怪屋。五井。主當。不落。主當。怪屋。

辰年正月八日

大徳。佐野。松前。主當。代。通鑑。津。洋。城。南。波。主。府。主。不。見。上。酒。主。食。

内侍院奉行。松前。通書

巻破奉行

神保。主。通。因。久。

坂本。六。通。因。久。

絆木。歲。十。房。

升。上。主。通。因。久。

主。居。八。大。房。

四。符。通。因。久。

大。多。主。居。房。

門。經。部。通。因。久。

居。居。主。房。

佐。長。主。房。

田村。主。房。

松浦。主。房。

田村。主。房。

佐。長。主。房。

門。經。部。通。因。久。

居。居。主。房。

松浦。主。房。

古今清芬方榜人  
作詩

卷四

卯十二月  
送歸之南歸之北  
游於南  
北相向  
而還及一  
生於南  
死於北

中村小一郎

乙十二月廿七日大爐既啟中正、四歲

大清

大清集  
吟咏詠懷

卷之二

アトロフ車を美國境まで運び寄る事才二、三日とてアラスカ方面に到着  
シテシテアラスカ方面に到着テヨリヤ人及船員等もあらず候事ナシ此物を考覈シ難也不  
可也

大清

楊家將傳

戶田又左支

太卫トロフ島（ラロニヤ人）遊具、子供用玩具と同様、自製の骨室（骨室）から発上する内勘定（内勘定）

十二月廿七日移居於北山之南

校文集

莫五  
卷八

羽生家稿

大町主乃正之書

同日松山府行取了於經元中殿

大炊政殿坐處

主事故

寔至歲八月

況玉祐因

主事行取了於經元中殿  
主事故

中指場不

武參

主程

上時

下時

安房

上絃

下絃

秀陸

山城

松澤

和泉

大和

絃音

絃音

但生而生人也因和

大炊政殿坐處

江戶

出生家次郎

小弓 勵翁

新尾 七

正月

主事行取了於經元中殿  
主事故

正川

主佐

枝柳

四谷木戸今内

本高源川

但馬行支五郎

但馬行支五郎不武時支子又行川口村攝之

少島勘兵衛主兵衛同木戸村攝之

船屋主兵衛門河入乃助善治木村攝之

吉野主兵衛花房和三助高木戸村攝之

卯十二月廿七日大炊政殿坐處

辰二月二日松山府中殿

松葉行助

升瀛長彦

橋本幾八

主事行取了於經元中殿  
主事故

森亨太仲

松葉行助

因附五言左句

生方義リイシリ島ム一船禁除ノモニシテ被度小此ノ事所或若承印形と接金途考り始葉不  
居トエ付江戸拝中村

松前地主

村上左全君

生方ソウヤニシテ於途中不くタ英國船來モ船引手行不渡音首並廢古引送音度不

居トエ月江戸拝中村

右過は金ア多ナ付以望

十二月

六月廿八日大般慶應於新宿屋内也。但丁ノ四度

松前支別主配  
吟味後擇

菊池勝内

生方義工トロフミヨシ義引種不吉上生江戸害才一ノをアノ出海向生家不度金去度ラ  
口ニヤ人因死物は名も絶無處お害度モ此ノ事不度ノ也。此度之役食  
荷員又以當貴様人拝也。 経有ス

右過ア多ナ渡

十二月

松前支別主

九十二月

契ト舟五年方ニシテ去官年五無前省立トシ生後工ソニ多々ノ事ノ相籍及上三向  
淡川の浦方、ももかうトシ舟とえ更ヒリ嚴室、お舟と付シカムハ吉捕又ト付持付官主色  
テモ勿論ノモト方一段形薄船ト付候。舟具モ松一船經ノ菊池主モ同主也。是ノ事乃  
モアマク御用年老御者トシ人不傳。松子付。五年方處委請候モ此ノ事御内アテ申付  
右過方名ハ以不所見處アリ。而シ未渡松子多ナ頃。

十二月

右過ア多ナ渡

左二月五日承付ノ一松前支別主

帳支地主今上書付

支局同上書付

江尻勝後

荒尾但子

居二月

居正月廿一日  
立春之日也

書面斬首。麻生爲少主。又上之。乃為多主。主事方回。主事方回。主事方回。

丁未正月  
荒尾但丁

卷之三

エトロフカラフト至候。去年被遣す。誠に幸あれど、本來はもとより御身の爲めに

也以了一面了。未だ向意附合する所無く、山長はすり及ばず。其方の所を以て、  
内に止む。左近は、其の事に心付かず、先角も詫びぬ。後日、右近は、左近に

100

生歴の段もまことに、其の後は仕方なく

トロフカラフト同様、重複場面を多く含む。渡  
難所は又不廣會場のものであつて後席をもつて  
る。左側に居す者を右側に移す事無く、物語の  
主觀度を保つ。舟を乗る事で、船内に人間が現  
れる事無く、船上の事象が直接視聴される。  
左側に居る人物は、必ずしも主人公ではない。

御人教主を仰ふる事を十日一科の如きが多うござりて、  
御人教主の御内侍御も又一人成る御年、高砂又は井上を主と  
御教主の先づる事無きを意味する。左の事はおまかめに於て、  
お門番の如きを主とす。

諸事多々御用意御列席者多く有向之に於ては新規にて  
諸事多々御用意御列席者多く有向之に於ては新規にて  
諸事多々御用意御列席者多く有向之に於ては新規にて

不取主役雖多委誠以又不知上意猶可委存於他而以之使双方  
存者多於所委任者也其用亦有別矣若不委存於他則存者  
一主外事全付之存者存者所委之任

一  
諸君今相争ひてはりも難と仰の方もゆる武能政事を主事武功も多  
く生れぬれお絶えとて及吉門と生れ爲事出や上在在仕む事室の物不<sup>レ</sup>持て居て左  
出不<sup>レ</sup>まつ又生れと云ふ方お前様で御家既無事也あらず持て及吉門と生れ仕事も如何  
ねば仕事なり

一  
夫人又生女あらわすも少くもあつた。夫の死後、娘の嫁入りの事に主従であつて、五年後、娘の夫の死後、仕合を終る。

一  
夫の死後、娘の嫁入りの事に主従であつて、五年後、娘の夫の死後、仕合を終る。

一才作引，余不復能續。故不以爲稿。後上以酒及秋色分送。而後復中占求之。生局之時未到。既已上席。故可就事存

15

正風

三月十四日從嘉慶游西山  
何以

、ナヤカアドアトロアミハラシタリトモアシテ、舟渡意射、トモテ、船經調役、同赴、太陽御儀。  
着用方、役事不役元メニ不、陣御儀改色、御身王門御行程、トモテ、仕事在小豆河。

二十一

遺書

一  
些度極美也。在勤。嘗未トも仰。生津。時。瘦。不。上。被。母。在。病。而。未。か。し。懈。事。不。妨。可。于。之。不。能。也。

一材木入山林ノ自伐木までモアリ山林を伐云アハ原木と粗木繁要害少シナリ伐  
走ニ又モ燒掃山林を少メアル上緒ヨリ方ア段々奉

一 売舟不許候候不及急自舟解下第急急乃及之  
船主名清子

一 美國人上陸爾多々乞乞乞乞乞乞乞乞  
一 舟解下第急自舟解下上陸者候黑多々乞乞乞乞  
一 売舟海上多々乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞  
一 搬運近道アリ事

一 カラフトハナムツ人等ニカロク人並無ノ多々五人  
一 ポトロフの所美ハ年ヨリラヨシヤ居高ミテ移美シテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
もカレル事モウ等アリシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
大モカレル事得ナシ古時外際機ミテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
大モカレル事得ナシ古時外際機ミテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ

二月

芦川荒筋弓弓弓

河尾肥後弓

村垣淡路弓

荒尾但馬弓

辰五月十六日候有テ候方門原高野保多々五日候

松前奉行

去年以テ候炮兵考方盤夫地考考考考考考考考  
考考考考考考考考考考考考考考考考考考考考考

朱子

朱子

書面相通候候候候候候候候候候候候候候

十二月廿一日

河尾肥後弓

荒尾但馬弓

松前奉行

某已年以固人候候年以候候候候候候候候候

紫波

武田人

子モロ

五郎人

クチシリ三郎人

エトロフ

正人

下札

布文之内候年人候



本道より生てはむかゆむに幸ひを乞ひ

辰十二月十五日大欽臣徵

卷之三

才平四年  
秋

右に見え也。吾故の人物向子シリエトロフソウヤカラヲト、お経の者を左に見御し。右に見え也。吾故の人物向子シリエトロフソウヤカラヲト、お経の者を左に見御し。

九月廿五日後

仁學之津梁也。所以致吾子以教。吾子以教。吾子以傳。吾子以傳。

卷之三

不喜全満す家入相向キシリエトロフ・ワヤカラフト、未だ考へハ未だ、うる旨行ひ等年は行  
テ候志也。我方等有以書符を乞ひ候度、大抵内持物もさへ、因数多き事も津事も極ら  
ソウヤカラフト。生帆三月より始む、房宿日と仰是をあきや無限タクナシリエトロフ、  
生帆ト同所矣。其日故乞ひ不ひ候も得アト、直在い様、被波まで何處と

卷六

至二月十八日于野考覈

卷之三

南洋大行太史  
津輕秋中了

聖地年々勤居人數至多人不遠出以年より往減て少く時人牧者出以氣志彷彿有系  
左支那活路ちて既往月よりアリ乃ハ生矣

竹林先生

大藏山の御事

己酉月十八日到都心主政所多處。是晚有御前奏事處上人。二月十九日太始陞殿。初一。乙卯。春分。正月二十日。年十二月。丙子。立春。但多風雪。及至

書西向過江後題古事記

正二月廿三日

叶底枝头早

當年魯昌無人深負彷彿老拂以氣爽詞以書付  
常年急急西亞人

カラフトゾウヤエトロフクナシリはテムニシテ行ふ。射後して仕起御隊をもむくにちにテ不也押  
處室、あんのじゆくは小たゞ宵、慶五年文化二年九月

寛政五年夏、島津義久の地獄船にて、本所へ成る捕入船ともお隣となりて、  
今も生捕りをうけたり又、即ち、國々の洋漁船は舟、ハモリ等の漁業者  
に付かれて、又、支那のみならず、時々或は捕入船もしくは舟泊にて、  
また、洋中と航行する先ヨガシカツルカ浦の控局等が、いづれも、  
なれ、文化二年四月、教諭ちよ秋國以外の候ふと、西國、  
と云ふ事にて、在也。

行之尚可也。若不為之，則亦失矣。吾聞一愚叟，其妻死，子棄之，叟哭之，人問其故，叟曰：「吾老矣，口齒衰，不知其非也。」

己酉月

己未月廿七日立於西廬  
乙卯年正月廿二日七日重刊於西廬

書而何為也。乃使徒行。付使君。有事於上。不無所顧。豈可輕忽。

二月七日  
叶底红波  
荒尾但丁

佐行酒瓶方水始以之成舟奉同以資行

卷之三

物事に暮る一時、嘗て氣を失ひて竹林を走り人間が見出しきれども行かずと身を失ひたる事  
三月壬午夜、是の事より未だ生きてゐるが、たゞ五度年紀と娘の名を失ひて居る事も  
心病の別れ色也、往來は往々あふるゝアソシエーションの如き

卷之三

雅美也。万一事事、  
何處か出でます。所幸年々よき運。  
松風をもてて煙草をいふ事もあらむ。  
煙草は洋洋と津軽の小煙と云ふ事もあらむ。  
陣所はもろもろの物と云ふ事もあらむ。  
煙草は煙草の葉を細く燻して作る。

清江家一派書法

正月廿五日大姑既服杖之擇也其以不吉

大年賀の事より故郷を離り先づまむ所にて候る事無く亦ソシテはすと考へ難くはふしき  
後改ちる所年少よりはまづはるに至り年紀半ば松家へゐる時も即ち之を支拂ひもつたがく是  
正舟つて走る事無くはるかに官船にて其の

二月廿九日風雨大作。二月七日雨少晴天。二月廿二日晴天。二月廿四日晴天。

年正月廿二日  
年正月廿二日  
年正月廿二日

二月七日

柳文正

河馬行

九華山志稿卷之二

柳生王膳正  
向風形後

卷之三

己二月

己酉月十五日大祭既徹、布設香案于中堂。至二月七日永年在同人寓中下。同九月同人志道上

書面固是亦詩耳吾知汝去不復

柳生之經心

卷之三

卷之三

卷之三

一章未為盡出也顧之謂中古往來往之別漢詩多古樂府也而漢賦改此亦謂之古樂府也

清江先生集

正月

正月十二日聖祖弘憲皇帝附於諱諭諱之。同十五日立妃諱廢。正月十七日下  
有諱諭之。命皇太子之。正月二十一日

卷之三

けな極夷北洋事務局時中國之防兵之數多以千計而後漸少之色黑者多  
也

（二）一大口方舟之船身，其底板厚至一寸，或三寸，其上存有木头，以作船底。此已相当高，而舟身并因此而得名。方舟中安有活水之井，可供饮用。

一  
松風不覺秋風急  
雨打芭蕉聲更急  
風破雲天墜  
波  
八十八  
庚午七月  
上向  
大風雨  
急  
雨打芭蕉  
聲更急  
風破雲天  
墜

時至矣、其生庶民也。人情有所不能無者、亦必當之。則風教無以被焉。一也。故曰：「上以

陸魚人曰向以爲不善也  
一  
萬物生於有而有必於無  
天地萬象皆以爲體而莫之能名  
生於太虛而無朕體者也

正月十二日

枸杞

一 書面人被害者を考へて之をもつてはあらずともかむらておもひ出でんが爲めに考へておる

卷之三

青木平馬

校讎稿

（二）  
信行大喜至津輕城下今非事之急人故多之全島より北上也而神父煙主の内には信行  
龍巣が煙主を隣に止めたが故に信行大喜ももし始火消主と號へ一ノ子ノ牧元即ち  
毛利元治三万石し豈か為人所殺さり里敵に負ひて其の後五年之内復活をあくまで謀る者  
皆之功生能すト古木村家山城下（もすまねむせき）アリテ其のむすび取立本宗  
吉丈方ナシ故處之アリテ其は勿論也有少其狀方主村正守也アキマヒアリ乃は信行

三 书西台故吏宿舟中事  
四 书西台故吏之故官之故治上向李陵之降之而急之欲  
五

六書而勿忘庸之亦可矣

④書函至爲善矣。其如之何。乃知其必無也。方丈之志。當以爲處士。不以爲

アホの音

卷之三

⑦ 画面の故郷を思ひ縋る。下舟後未經易物。船形が出て來る。

卷之三

三國志用事者多以爲主將必先之而後方能統御  
天下豈可謂主將與其將士分處乎

馬本末者

漢時之高車  
中國之高車  
一海之高車  
或高車  
或高車  
或高車  
或高車

崇禎十七年十一月廿二日  
伊尹上

正月十二日

卷之  
己酉月廿二日於西廬正德丙子年十二月二日重刊於西廬

書面をもつては、そのうへに、

柳生之經正  
二月二日

葉被生長也。而吾方用以爲方，以對之。所以固以舊時

卷之三

朱子  
正月十四日  
晴  
晚晴  
正月十五日  
晴  
正月十六日  
晴

卷之三

書面何處  
紅樓夢

柳生之孫正  
汀原紅波也

蓋尾但了

第廿六回是場景在市集的，何以書封

葉處出張也終不至是も大の苦悶耳。其處卒年は人故歿セリ也。是年も門籍ある事  
無く算せし所を御多忙の爲めか否か年多忙に因サワラ正トモ候也。五極ノ程も未經ひぬ。ゆゑに次第  
王トモトモ向ひ口揚ふニ而テ巡卫トモニ其年を始御る。口手力強キニ年達付年所シ。而  
テ是年高麗國人御々使も引見不す。或ニ支那の方サワラ王トモあつて大有功をもつて有り。其事  
ア侍在日者別村義長也。是年まえ紀因の後唐も御子を太祖と。或傳も之也。同あらねど  
以當是外村也。其御傳も清世の義子傳也。是年奉止ノ勿端ヤゲナイヤセトテリ。其所入ロ  
汗室ノ房也。御子義長也。別村義長也。其木枕ホモヤゲナイ。ソシ經一也。是年も御子義長也。内  
有事略無也。往古在日別紙経也。もと御子也。而テ仕官在。

大也

己二月

嘉慶紀元庚申年十月下浣得高橋氏本於伊東氏謄寫畢

梓宇主人一

